

府中 駿河列

阿部川の流

特260
234

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



持 260
234

●本書の校訂にあたりて思ふ所を述ぶ

▲本書は半紙二つ切に筆寫されてある五卷もので一巻は一冊に二卷も同じく三巻も同じく一冊であるが四巻からは始めに標題なく署名なく四と五を併せて一巻に五卷には同じやうに六と七とをあはせてある

▲弊房の覆刻本はこれを上下二卷となし上巻に二冊を收め下巻に三四五の三冊を收めた、上巻の分には都々逸がある都々逸が東漸したものでどうかの考証にもなり都々逸小史の尊い材料をば提供してゐる

▲七巻に清水観音のことがあり、それにしみづと振假名がついてゐる、作者が江戸人であつたからか、しみづをしみづとしたものか、もしさうであつたならば本書は自筆本であつたものか、駿府の人が筆寫したならばしみづとする筈がない、自筆本でなければ江戸の人が、筆寫しながら振假名をつけたものであらうと思へる、ふた町を通り抜けて川邊へ出るなど土地の地理にはあかるかつたが、たゞ一つこのしみづといふ振假名が氣がりの一つになつてゐる



▲然し本善の印判から押して幾冊か寫本が出来て貸本になつたものかも知れないと思はれる、それで誤寫となつたのであらうか

▲丁字屋といふのは俳諧師葛人を出した家である

▲後書は悉らく逸作されまい

校訂者識

全本善 阿波川の流

雨雲軒谷水著

丁字屋第三

此家の筆頭にすゝる菊の助今を盛の名娼も戀の奴にうき思ひこし行方の物あんじ折から來かゝる客馬鹿ばかいわれどそれもたゞならぬ風俗年ハ二十八九いやみのなき色男常は何ひとつぬげ目なけれども戀に心も亂れ髪かくすさらしのほふかむりはやく馬鹿「コウしまいなよ 菊之助「いゝかへ 馬「いゝよ すぐに菊之助の格子のそばにより 此客加番者也

ヤリて「もし井筒やへそふ申てやりましやうかへ 井筒やは 馬「イヤそふいつてハわりい ヤリて「そ

れでもしれますとわるうございます 馬「何サしれるこつちやアねいから内証ハいゝよふにして

おゐてくんやよ ヤリ「さよふなら見つからぬ様になさいまし 馬「これは茶屋によほど下りもあるゆへ

かたづけざれマおくらぬゆへうつそ

馬と来り 菊「アノきのふ井筒屋のおゑいさんがやしきへいきハしやせんかへ 馬「来たのさ」ど
しなり 馬「どふするつてしかたがあるものかな立時にはらおふさいつて歸した 菊「そ
うしなすつたへ 馬「承知していつたかへ 馬「承知しねるでもねいにはし方がねいそりやアアいゝひとつ飲
れで承知していつたかへ 馬「承知しねるでもねいにはし方がねいそりやアアいゝひとつ飲
ト茶わんにてひとつひっかけまた出すか 馬「なんだへおよしなんし 馬「いゝやアうつちやつてお
むろつぎかれて菊之助の顔をミて居る 馬「ふんとする馬鹿また一ぱいのミ又出すかむろつがぬゆへむ
けい 馬「そんなら勝手におしなんし 馬「ふんがせて飲んとするきくの助こらへかれてきせるでた
いき 馬「おへねいきちげいたべらぼうめ 馬「銚子をとつて口からすぐに顔をしかめながらのんで 馬
落す 馬「おへねいきちげいたべらぼうめ 馬「銚子をとつて口からすぐに顔をしかめながらのんで 馬
「人の氣もしらねいで 馬「おれの氣もしらねいでこれもつと酒をこつて來いのかむろ又菊の助 馬
「いゝよもつてきや 馬「銚子をかへてくる又手酌にてひっかけのミしまいとやこふするうち酔がまわ
思ひながらさすが愛情のななしさにいき 馬「これおミとやおがい茶わんに水をもつてきやア口をお
見てもいられず存中をさすりながら 馬「なんぞ藥ハねいか 馬「それだからおのミなんすなさいふの
いすぎなんし 馬「ト口をゆすがせ座 馬「なんぞ藥ハねいか 馬「それだからおのミなんすなさいふの
敷へつれ来る

におミとそこのたんすをあけて万金丹をよこしや 馬「アイト藥を 馬「さアおのみなんし 馬
「いめいましいとんだめにあつた 馬「心がらだからよふさんすハ 馬「それだつていめいましい
わな 馬「なにがハ 馬「なぜつてもふ此間でハ何をしても手につかすか 馬「それハわたしもそ
うでありますわなそしてどふしてもあさつて立なんすかへ 馬「そふよおれも色々考へてミたが
のどふあつてもひとまづ江戸へいこふよそふしねいでハ女房子がろとふに迷ふわな 馬「まだ
江戸に心が残ていなんすか 馬「それでもこつちにいた所がこれぞいふかせぎも出來すそして
コウやつていればこそこゝでもまアだまつてあげるよふなもの屋敷を出たのがしれこみる何し
にあげるもんか又第一手めいの爲だ 馬「そんなら勝手におしなんし 馬「トずつと立ていかん 馬「コ
レきつそふかへてどこへ行 馬「どこへ行とはどふよくさんすそふいふ氣さは露しらす今
までくろふをしいしたかくやしうさんすこゝ御はなしなんしわたしやしんでしまひます 馬「ト
ばと

ふしてわ 馬「これさ壁が高いわへ聞へてハよくねいわな」聞へてもよふさんすもウこふなる
つと泣 馬「これさおれがあやまつたよもふ江戸へハいかねいから堪忍
からは義理も世間もいりいせん 馬「これさおれがあやまつたよもふ江戸へハいかねいから堪忍
しろへ」いへぎりづめでこつちに無理に御いでなんす事ハありません夫程かわいもおか
ミさんの所へはやく御出なんし 馬「くどいわへキアおれがいふ事をきけよさうれさしつゝこい
といふのにさ 馬「言事があるならおいよなんしふしやうながら聞てあげいしやう」ア、い
つたのハ手前の氣を引てミたのだそふいふ心をミるからハこつちに居るからあんじるなよ
「わたしの心もしらぬかなんぞのよふにいまになつて氣を引なんす事ハありませんそふうたが
ふ心が有てハ末があんじいす 馬「ばかをいへまアそう泣て計り居てハさふだんも何も出來ねい
からおれが言事をよく聞よ 馬「聞いしやうからまア○○○」ト○○○○○○○○○○○○○○○○○○
ならいよ〜いなんすかへ 馬「さねいよととも江戸へいつた所がまつばだかで首のまわされ

ねい程借金をおつて何面目に顔があわされるもんか 馬「そしていつ屋敷を出なんすへ 馬「あ
した出よふよ 馬「何やかやちつとわありいしやうからそんな物をこつちへもつて来ておき
なんし 馬「はづかしいこつたが以て來るものハ椀と膳ばかりだ 馬「ばからしいそんなものが
何になるものかねそんならあすかへんなんすかへ 馬「そふよまア一べん歸てから出よふよ 馬
「出てからどこにいなんすへ 馬「その事よ時過ては安東の村也 安東 名主の所にでも居よふけれども
どふも當分ハいらねいひよつとや敷の者にでもめつかつてハつまらねいからそれに當惑して
いるのよ 馬「二人ながらしげきく」そんならこうなんしわたしがうちへまアミふふんいつて御出な
んし 馬「それだどつても知もしねいものゝ所へいかれるもんか 馬「そりやあわたしが文に書て
そふいつてやればよふあります 馬「そふでもしやうかそれじやア當分あわれねいといふもんだ
きく」なせへ 馬「なせつて清水からこゝまでハ三里餘りあるものを今迄のよふに一寸こられるも

此清水とハ三保の松原向の きく「それでもしかたがありません三日や五日ぐらいハたがひに
 んか港にて府中より三里あり きく「しかしあす屋敷を出ると急度やしきからこつちだろふと思
 逢度も あだ「こらへていしやうわな 馬 馬「しかしあす屋敷を出ると急度やしきからこつちだろふと思
 ふから人が来るだろふしそふするこもふここの家でもおげねいから逢事もうつかりミハ出来ず
 どふしてあつたもんだろふ きく「當分こそ内証でも氣をつけいすが二月か三月も立バひけ過に
 隠れてしれなひよふにどふでもなりいすわな 馬 馬「二月か三月と口でいふけれどもそふあはず
 にいられるもんか きく「その内ハ内証へ客が呼といつて傳馬町か又太田屋へでもいきいしやうか
 ら随分あわれいすわなそれハくろふニせす内でけぶりを悟られぬ様におしたんし 此傳馬丁
 府中の入口の町也はだこやあり太田屋とい馬 馬「そんならアそれはいが今夜がまづ名残だぜあす
 ふハ料理茶屋也此ニヶ所へ女郎をよぶ事有 馬「そんならアそれはいが今夜がまづ名残だぜあす
 出ると二三日ハあわれねいといふもんだの きく「そんな事をいつておくんなんすなかなしうあ
 ります此上どの様な事か出来てもかならず江戸へいつておくんなんすなへ 馬「おれハ氣遣ひね

いが手前がどふもきがよりだよ きく「なぜへ 馬 馬「女郎さいふものハ夜毎に替る枕だものをその
 うちどんないろ男が出来めいものでもねい きく「人ハしりいせんかわたしに於てハそんな事ハ
 神かけておつせん是がほれはじめのほれじまいでおつす 馬 馬「あんまりそふでもあるめい きく「
 アレうたぐり深いそんならこれから客を取ても一所〇〇〇〇〇〇まい 馬 馬「ばかをいつたもんだそ
 れじゃアおれをどふしてすぞす きく「それでもうたぐりなんすものを 馬 馬「そりやアちつさわう
 たぐらないでさたさへはだ身をゆるしても心さへゆるさにやアいゝがそのかほでハ誰も迷ふか
 ら心遣ひだよ きく「にくらしい口だよそりやアぬしの事でありますなぜこんなさまよわせなん
 した ト〇〇
トいふは實に戀の情より外あるべからずかくて次第に更るに隨ひて寂々ばくくとして手ごうつ
 音耳にし便所に通ふうわぞふりの音ハふられし客の旨をうたがわせ犬の鳴聲ハ間夫をしらす やり手
 る合圖となつてそれともしらず兩人は夜のしらくとなり人影の明かなる迄れすこしければ
 「もし馬鹿さんもふ夜があけましたよ 馬 馬「ウ、ナニ夜が明たそいつハ大變だあかるくなつちやア

歸られない駕をそういつてやつてくんな ヤリて「ハイト出て行程そふ言てやりましたが皆らへ
出ておりませんこさ世所のかこき皆百姓ゆへ日出馬「そいつハつまらぬいき」「そんたらけふ御
出なんしな ヤリて「それでも明日御立じやアございませんかへ」馬「そふよき」「晝時分に御歸ん
なんしな 馬「そふしやうよ ヤリて」ト出き「それじやア今日歸らずにすぐに清水へ
御出なんし 馬「それでもいゝがひよつこやしきから迎むかひければいゝが」き「まアよふあ
りまさアなもふちつと御休やすみなんし何をそんなに考へなんすへ」馬「これぎりもおもへバ心があ
とへひかれるよふで皆たがなつかしいよ」き「そりやアそのはづさ今までのなんした所でありま
すものをへやりて來りて」もしへ御屋敷から御人が参まりまして何か御目にかゝりたひとあすこに
待まちております 馬「なんだなしながら出て行」トもし御屋敷で御前が御出なされぬとつて御同役
が氣をもんで御いでなさいます一寸お歸りなさいましたとおつしやつて遣つかへさいました 馬「今に

いかふから先へ歸らつし 使「それでも御一所につれ申てこいさおつしやいました 馬「そんなら
そこにまつて下つし」ト座敷へ馬「まア一べん歸てこよふよ」き「それじやアこれぎりでもふ來
なさいませんかへ」馬「なに晩にハ一寸なりと来よふそふでなくつちやアはなしの文もあるから
き」き「きつこ御出なんしよ 馬「くるよ時に六門からハども出られぬい」き「なぜへ」馬「井筒や
の前があるから」き「こゝから御出なんし」ト見世先を通りぬけると木戸ありそれよりはたけを通る
なつて通る程明て町家のうらなりそこをぬけどぶの杭の上を
過すぐ出それより川なべと言所へいづるなり是第五穴なり

全本善

第四

長き浮世に短き命暮す苦界のその中にかわい男へ別れしより絶て便りも泣あかす髪も亂れてふりかゝる雨よりしげき我なミだきく「いつそ死にとふおつすいもふと女かめぎく耶かめ龜かめ菊かめ」またそんな事をおいゝなんす氣をしつかりこ御もちなんし霜之助よふく立上りたんすより馬鹿がかめ「そりやア馬鹿さんの起証でハありませんかへなぜ御破やぶんなんすきく」もふ持てゝもむだでさんすものをかめ「それでも御歸かへんなすつたか何だからしいせんものをきく」何それでも迎が來た日晚にきつと來るこいゝなんして來なせんものをそれから今日でちやうどゆびを五日おひになりいすものをかめ「馬鹿さんだつてもよもやうそハつきなんすまいきく」それでも男といふものハ氣の多いもんぞんす此間このあひだの晩もどふでも江戸へいかふこいゝなんすからわたしがかんしやくをおこしたならそ

んならこつちに居よふたゞ氣を引て見たのだのなんぞといゝなんしたがほんとふにいきなんす
氣だつたと今じやアおもいゝすよ思へばくやしいトはがミ泣かめ「あれもふひけ過でありますや
りて衆に聞へてハ此上ひよつさ馬鹿さんが來なすつた時に氣をつけられてハ都合が悪ふありま
すわなきく「どふしていまゝでさたがありませんものを江戸へいきなすつたには違ひハありま
せんかめ「それかわらふあり
ますトとやかくなだめいやりて「龜菊さん御客だから和歌屋までお出なさいましとかめ「エイ今
時分析のハるい菊のすさんいまぢつき往て來るから待てゝ必らず短氣を出しておくんなんすな
よトそこくにしたくしてかわる一人つれ信の屋の脇かめ「ヲヤ馬鹿トいかけ急に口へ
んした菊之すさんハもう江戸へ行てしまいなんしたといつてかん積ばかりおこして毎日く泣
てばかりいなんす馬「そふだろふよかめ「氣計りもんでさぞはらをたつて居るだらふとおもつて

氣がきでハなかつたよかめ「何しろまア一寸しらせてまいりいしやうからそこにまつて御出な
んしト一さんに歸りいそがわかめ「アノト耳に口馬鹿さんが來なんしたよきく「びつくりヲヤほ
んさんすかどふしてへと今の泣顔明かへて急どこにいなんすへかめ「信の屋のまへにきく「そん
ならいつてきいしやうトかけゆくをかめ「もし客衆もたひにそとへハいかれいせんわなきく「ほ
んにそふさんしたつけねあんまり喜しいまぎれさつぱり氣がつきいしなんだそんならどうして
逢ふねかめ「こうなんし見世の表の格子へ出てよしかへトわりふをあわかめ「もし馬鹿さんそふ
申ししたらいつそうれしがつてねこゝへ來そふにしなしたよ馬「そりやアいゝがどふして逢
ふかめ「あのね格子のあつちの方にいなんすから戸を少しおたゝきなんすミそこに居なんすか
ら大きな聲をして人にきかれなんすなへ馬「アイノゝとしてお前客かかめ「アイいま和歌屋へ
いきいすからまた歸りに御目にかゝりいしやうたがひに別れおしへの通り格子たゝき「馬鹿さん

どふしたのだへ馬「これさ聲が高いさぞ腹を立ていたろふの」立たぐらいでへありません
くやくつてく泣てばかりいゝした此間このあひだよる來なんすと云なんしたから内への文も書て待て
いゝしたに御出なんせんからあんじきつて一ばんでも寐ハしいせんさつしておくんなんし馬
「そりやアおたがひだあの日家へ歸ると己が逃るけぶりがしれたそふで直すまに先番さきばんに立たていゝつ
けられて出るも引も出來なくなつてあの日こつちを七ツ過に立たがそれもおれひさりならいゝ
が二人連つれなものだからどふする事も出來ずしかたがなくつて氣がきでへなくどこをどふしてい
つたかしらねいとその晩よし原宿はらじゆくりで宿やどへついて人の寝しづまつてからそつさぬけ出た處が九
ツよそれからなんでも足あしをはかりにむちうになつて江尻へ來る七ツを打からもふ屋敷やぶしの立たに
間もあるめいミつかつてハつまらねいから直すまに江尻へ泊やどていたが何が一日に二十里程あるいた
ものだから足がはれてきのふの朝迄そこに居てタアこつちへ來たがあいたくつてならねいから

ひけ過に來ていたけれども手前も龜かめぎくさんも客がねへミミへて出ねいから九ツ時分までまご
くして居てつまらねいから傳馬町へ往つつて泊やどつていた今朝でもかの名主なぬしの所へ往つふと思つたが
どふか身がちよんでおかしくいきにくいからまだいかねいのよきく「そりやアさぞ苦勞なん
したろふ夫おとことはしらすあんまりなもんだとけふも龜菊かめくさんとさつき迄恨んでいゝした堪忍かんにんしな
んしもふ二日三日もまつて便りがなくバわたしハ死でしまいゝす氣でありました馬「已なほもそれ
があんじられてむね計はかりりいためていたしかし逢あつて喜よろこしいとハいふものゝ顔も見る事も出來ずお
びんづるを見る様に爰こゝに立て居てもつまらねいもんだ龜かめぎくかけ來り「あのねわたしが客人
が返かへつてしまいいしたからねわたしが部屋へそつと御出なんしまア内うちへいつて様子ようすを見てきいし
やう程ほどなくさアお出なんしそふいふ風ふうじゃアミつかりいすからまアほうかむりをして尻をおは
しよんなんしりトかいしく仕立引つれてうちへいかめ「まアそこに御出なんしト戸とを立たけて行
いり遠とほく菊きく之助のすけ來

り戸をあけてはいり馬鹿にひつた馬「是までハしおふせがどうも氣がわりい」^{きく}「わたしも

りいだきつく二人のむねどきく」^さこの内龜ぎく茶碗ちわんにかめ「さアうつとづでもおのミなんしてしまうくつだろふがねあかり

酒一ぱいもち來り」^トあんどふつけし屏びん「氣をつけておくんなんし

があつてハわるふありますからけしすよト風引廻かぜひまわしいでいゆく」^よかめ「アイ馬うま「おれも思ひきつてあした名主の所へいこうよそふしねいけりやア身がさだま

らねいトいふもんだ」^{きく}「それがよふありますをしてまた何をしよふと思ひなんすへ」馬うま「されば

サおれもそれに當惑しているよこてもすきくわゝもてす又町人ちやうじんといつた處が商あきなひ事ハさつぱり

しらすといつて遊あそんでいてハつまらずまま當季とうきしのぎに覺た手で村の子供こどもの世話でもしよふよま

たその内にはいゝ事もあるめいもんでもねいから」^{きく}「そふでもななんすがいゝがとても江戸

の縁えんにハいきいすめいよ」馬うま「そりやアしれた事よそれだから何かにありつく迄ハ手前てまへの方で都

合あしてくれねばいかなひぜ」^{きく}「そりやア覺悟かくごでありますアその代かりにどんな事があつてもこ

の上見かぎつておくんなんすなよ」馬うま「おれにハそんな事ハねいが手前てまへがかわるめいぜ」^{きく}「何

しに替かりいしやうそれハ氣遣きぢひないがまだ年ねんも四年よんねんといふもなんすからその内にもしもあき

がこよふこそれが苦勞くろうさんす」馬うま「それハ五年ごねんが十年じゅうねんだろふが氣遣きぢひないがもしも手前てまへとこふな

つている事が内証ないしやうへしれてハせがれでもした時につまらねいもんだ」^{きく}「それだからねたまに

來てしげくハおよしなんし」馬うま「久しいものだ歸る時にしんぼうしろしといつて晝過ひるにハもふ呼

によこすでハねいかおれよりそつちでしんぼうするがいゝ」^{きく}「あわづにいとどふも氣にか

よりいしてなりいせん」馬うま「それミろ口の下からそふだものをこれからはいやでもほんにしんぼ

うしねいければならないぜこふしのんであわれるばんハすくなし又茶屋ちやへ行てもたど行けるも

んじやアなしその時ときに身のつまりとなるしました此上ことも今までの様ように外がいの客きやくをわるくして

ハわりいぜなをく」^{きく}大事だいじにして何なにから何なにまでしてもらわにやアおれおれといふやつけい者が出來た

もんだから氣をつけろよ。馬「それへくろふなんすな又あす安東へいきなんしたらこつそり龜
ぎくさんの所まで人でもおよこしなんしよ。馬「知らせよふが人だつても今迄のよふに自由にハ
ならずたどもよこされねいもんだからあんまりさつ速だ(やく)がちつころふか。馬「一兩ばかりハ
ありますからもつて御出なんし。馬「みんなもつてつたらこまるだろふ。馬「何よふあります
ト部屋へゆき持て。馬「何から何まで氣のどくだよのふ。馬「あれまた外人がましい事ばかり此上
來て馬鹿にわたす。馬「どの様な事でもぬしの爲ならいとひせん。この内だんくくぜつもつれ來り筆にかき。かめ「もふ七ツ
でありますよ。馬「そんならいこふ。馬「にくらしい時だのふこれからいつ來なんすへ。馬「いつ
來よふかあつちの様子次第よ。馬「たよりを早くよ。かめ「さア御出なんし。トまたはふかむりし足早
馬「龜菊さん御禮の申様もねい此上とも御願ひだよ。かめ「何御禮なんぞとおよしなんしそんな
ら。馬「おやすきよ。門番の聲ウ、

第五

思ふ事叶わねばこそ浮世とはよくあきらかにさへわたる軒もる月を見る度にしばしハおふ袖
の雨わづかな筆の命毛ですみながらへし其日より便りにおもふ戀人のうわさ言のむねのうち
硯の水に我顔もいととおもひのます鏡外人の子より現在に我子ハ二人有ながら物書よしもそふ
應に人におこりハさせまじと思ひし甲斐も水のあわ心がらこはいゝながらなんの因果でこの心
苦トおもわず涙はらくとこぼせしが名主の馬「きア皆がけふハ十五日だからしまいなせひりそり
ヤトおもしろしと机がたびしとしかたづけはい明日と出て行跡見おくつて江戸より。長兵衛「もし江戸
來りし我妻の文封おし切てよみながらしはし涙にくれにけり名主長兵衛そげへより。長兵衛「もし江戸
からなんこいつてまいりました。馬「とわれて面目もなひ女房子のなげきハ是非もなひが年よら
れた御袋の苦勞を思へばどふも生てハいられません。長「ばかな事をいわしつたもんだ成程おま
への不了簡(りょうかん)はいふものゝあの道ばかりハなんともいわれねい又死(な)しつた所が御袋様や女房子

が何をうれしがるものかね 馬「それだといつてこふやつてミス〜御袋の苦勞を聞て居てへ人でございません 長「はて今迄の事ハ夢として今から江戸へいきなさる氣ハねいかねそして又先途中の様に菊之助にも逢れる事ならまだしもの事だし今になつてハそれもならず何をたよりにコウやつて居なさるといへばどふかわたしがおひ出す様だがおまへを獨計りおいたこつて内のいたミにもならなひから居るなら死ぬまでもいなさるが〜が末がつまるまいとおもつてさ

馬「なる程段々の御異見さら〜無理は思ひませんが耻かしい事ながらどふいふ惡縁かあれが事へどふもわすれられません又私ゆへ今ではきうくつなめもしいその上わづらつていると聞ば猶さら不便にどふも別れられません 長「それ程に思ひなすつていなすつてはとても異兄も聞なさるまいそしてこふやつてあふ事もならず居てどふしなさる 馬「さればそれがわたしも苦勞でございすいつか中のよふならまだやかましいなんぞこいつてもこつそりと文の便ぐらい

ハ出来ましたが今でハそれさへならずと思へバ三度のめしものどへハさつぱり通りません 長「はてこまつたもんだ今になつてハどふも仕様もねいア、わたしもむかしの身なら夫程に思つていなさるものをどふなりとして一所におゐてうれしがる顔か見てい トトもにもらひ泣せしが涙おぐいしまア〜そんならこふやつていなせい待ば甘露の日よりありだ又好事もあるだろふ 馬「さよふでございすがどふぞひこつ御願ひがあります叶て下され様かね 長「これハあらたまつた何だねこう心安くなるも他生の縁だろふから身にさへ叶た事ならなんなり遠慮なくいゝなせへ 馬「そんならどうぞ丁子屋へ一ペン往ておくんなさいまし 長「ウゝそりやアいきもしやうがいつた所がわたしでハはじまるめいぜ 馬「何文を書いてやりますからそれを菊之助の妹女郎の龜菊にそつと渡して下さいませしそしてまたいろ〜御咄申て御頼申事がございす 長「すい分そふいふ事なら往てもあげましやう文を書なさるがいゝ今夜にでもいこふそしてまた咄といふ

ハなんだね 馬「ちつと申にくいが必ず留だてして下さいますな ト 聲にて一向わからず 長「そりや
アいよとはいわれぬいがさても留てもとまるめいよふございますそふ申まじやう 馬「何分にも
御頼ミ申ますついでニ江戸からきた文も一所にしてやりまじやう 長「そふしなさるがいゝ 折か
らす ガアく

(巻の四)

全本善

第六

人しらぬ思ひ駿河の國にこそ身を小枯こがらしの森傳ふ風の便りもつきはてて神も佛も今ハはや頼たのミす
くなきこの上昔に替るなりかたち寄よもさわるも涙聲 なみぎ「もし菊のすさんかいが出来まし
たむりにおわんなんしそふしたならちつとは力も付ついしやうそふふさいでばかりいなんしてハ
わるふありますよ 菊之助母「さよふさこれちつこいやでもたべるがいゝそなたに若わもの事があ
つてハおれほどふしやうと思ふちつとはおれが氣にもなつてミたがいゝ成程親ながらもつらい
勤をさせるといふ様な邪見よまけんな事ハなひがそれもこゝ様の長の病氣ゆへさしつまつた藥代にふた
りともないかわいゝ子を手ばなすこいふほどの様であるふ去ながら達者でさへいればよりく
ハ顔をみるのが樂たのしみに居るよふなもの頼たのミに思ふ手まへが ト言さしてしきり きく「かゝさんもふ

ないておくなんすな御前がそふ言事をおいゝなんす猶くゝ氣色が悪うありますわたしとてもとゝ様は先立なんすし頼みに思ふハ御前ばかりそれ故につらい中にもはやく年があいたら御側に居て手自まんまもたいてせめて少しの御手助りにもごおもつておりましたが一昨年おととしの春ひよつと馬鹿さんに出いしてからなじむに随ひさふいふ縁心があじになりうかゝ呼うちその年の九月江戸へいかねばならぬといゝなんすから歸してハとつい留立したが運のつきそれから龜かめぎくさんの世話で忍びくゝに逢が樂たのしみにおらふうちだんくゝ内証ないしやうへもしれ今ハなひしよのたよりもきびしく留られそれをあんじくゝて此病このまいはんに思へバトうちふして母「これさくゝ又泣なよなる程それも互に思ひおもわれて樂しむも勤まのうさはらしただからありうちの事とはいふものゝ聞きば馬鹿さんさやらも江戸にハかゝ様や女房子もあるそふだしそれをふり捨てこちらにいさつしやるさいふも手前ゆへなり又金かねにもつまなすつたでもあるふがそのおかみさんや母様

の氣になつたらまアどの様であるふあきもあかれぬその中を引わけられたも皆そなたゆへにさぞ恨うらみでいさつしやるふそれを思へバたごハまゝになつてせう事が出来ても義理にも此母がそわせてハならず又さつきにもこゝの旦那さんのいわつしやるにハ便りもならぬ様にせいたならもしも馬鹿さんも江戸へいかつしやる氣になるまひものでもなし手まへも思ひきつたなら身の貸かとおもふからとわしに異見をしろといわぬばかりの口うらどふぞなるふ事ならそふして此母にもあんどさせ一ツには身の爲ためさいふものだからとつくりと能了簡よくわかんをするがいゝ菊之助きくすけハしばしよふくゝ「だんくゝの御異見さらくゝ無理とはぞんじいせんがおもひまられる事ならば是程ほどに煩わづらひもいたしいせんそして馬鹿さんだつても今さらどふもたとへあわずに居ても心の縁ゆかりはきられいせん此事ばかりハ堪忍して御くんなんし又むりにとならバとても病まひハ直りいせんト思ひ切たる一言に母「それほど迄までに思っているならどふも仕方がないむりにといつたら短氣たんきな事母もせんかたなく

でもしてハなげきの上のなげきだからそんならア氣まゝにするがいゝがそふねてばかりいて
ハつまらぬからどふぞ少しも能なる様にしたいゝとどひがかならずたん氣を出して親や旦那
の名を出さぬよふにしてくれろよ涙をおし どれ下へ行ってきましやうひよんな事をいゝ出して
大きに泣せたかんにんしや子を思ふ親の心ぞいぢら 「ほんにかゝさんや何かの事をおもふ
といつそ死とうありますよかめ 「またそんな事はかりおいゝなんすしになんしたつても馬鹿さ
んにあわれもしいすまいそれよりちつとも早くよくななんしてまちなんしたら其中にはひよ
つとあわれまい物でもないから何やかやくろふにせずきく およしなんし 「わたしもちつと氣
散かそふき思いゝすけれども思へばおもふ程馬鹿さんの事ハわすれられいせんもしも是ぎり逢れ
ぬ事ならどふしいしやト又わつとなき出す龜龜もともに かむろ 「龜ぎくさんに客人が御出な
んしとかめ 「いま行からまつて御出なんしとそふいや かむろ 「アイ かめ 「そふして居なんすき

思ひ出して悪うありますからちつと御休やすみなんし今行てきいすからト座敷 客長 「コウ何をして
いたのだ かめ 「今ちつと用がありましたからさ 長 「目をどふした かめ 「なんだかいかいつてなり
いせんからこすりいしたらあかくなりいした 長 「うそをつくぜ菊之助とこで泣て來たろふ かめ
「ヲヤどふしてそれを知て御出なんす 長 「ちつとわ知っているのさそれに付てでいぶはなしがあ
るぜ かめ 「うそを 長 「ほんこふよ馬鹿さんの所から文も來たよ かめ 「ヲヤそして御前さんハど
こでありますへ 長 「おれかおれは安東あんどうの長兵衛でございます かめ 「どふしやうのふさつぱり知
いせなんだつけのそしてまア馬鹿さんハどふしていなんすへ 長 「どふもしねいがつまらねいの
よそれでおれがゑんを切せに來たのよ かめ 「そりやアおまへがなんとおいゝなんしてもどふし
て縁がきらしいしやうそのくらいならわづらいハしなんせんわな 長 「それでも馬鹿さんハ文を
のこして江戸へいつてしまつたぜ かめ 「ほんとふかへ 長 「うそをいふものかなそれでおれに文

をさぐりてくれろ頼んでいつたよ かめ「それじゃアどふしいしやう ト我身のよふに 長泣たこ
つてはじまらないそれだから菊さんにそふいつたなら切さア仕方があるめいぜ かめ「それをき
かせたなら死でしまいなんしやう 長「そんなに思っているかの かめ「いる所じゃアありませんそ
れでなくつてさい此間へ死たいのなんぞといつていなんすものを 長「そんならほんこふをいお
ふ江戸へもどこへもいきへしねい かめ「なせうそをおつきなんしたわりいしやれさんア 長「い
んにやよひよつこそふいつたら思ひ切事もあるふかとおもつてよ此文をやつてくんなせい中に
江戸のかみさんの所から来た文もはいつているせそしてまだいろくはなしがあるから見てし
まつたら來なせひ かめ「見せたらさぞよろこびしやう ト菊之助か座敷へ かめ「菊のすさんおよろ
こびなんし きく「なにかへ かめ「馬鹿さんの所から文がまいりいした きく「どふしてへ かめ「わ
たしが客人が安東の長さんだとさそれでわざく此文をもつて來なんしたのさそして中に江戸

のおかみさんの所からきた文もあるそふさそれ(41)にまだいろくはなしがあるとさまア早く開て
御見なんし きく「どふしいしやう夢のやうでうれしいね ト飛立程にそふく
馬鹿が文を開てみる

一筆申あげなく久く御めもしもいたし申さず御なつかしさいわんかたなく聞まし候へば
段々の御苦勞に御氣合あしくならせられ候よし風の便りに承りいかゝいたさんとはぞんし
おり候へども何を申も便りもならずむねのミいたためおり候此間は少しも御心よく候やそれ
のミ日々にあんし暮しなく我身事も御存の通りつまらぬ身の上にてうつらく暮し三度
の食もすまますさりながら長兵衛殿の深切にて何から何まで世話になりし大恩中く申つ
くしがたくそれ(42)よりも能々御禮御申下されべく候かつまた江戸よりの文もまいりだんく
むりならぬ事ゆへ身につまされていかゞいたさん(43)に十方にくれおり申候御さつし下されべ
く候くわしき事ハ文に書つくしがたくまた人目にもかゝり候てはわしく候まゝ長兵衛どの

より御聞下されべく候たゞむねの中御さつし下されかしく

「どふいふ事かはやく長兵衛さんに聞こふありますよ」かめ「まア此文を御見なんし

女房ふま御見捨ありし我身ゆへ御取あげハあるまじく候へどもあまり(マ、)旨にたへかね

筆しめしあけなくまづとや過し御分れより人の便に承り候へバいつもながら御機嫌よふい
らせられ候よし影ながら御喜しくそんじあげなくつきまし我身事もかわりのふきは筆のあ
や御分れより長き一年をゆびをおりもふ幾月とそれをたのしみにまつに甲斐なくその御地
に御留りなされ候と聞まし候よりいかゞ致さんと人のこゝちもなく驚入候去ながら御前様
には露ほども御うらミはなくなたゞ私つたなき故と思ひあきらめ候へども女の心のあさ
ましさにおもひにあまりてハ泣ふしそのミならず一人の子供も日にまし大きふなるにし
たがひとゞさんはいつ御歸りだはやく逢たいどふぞこゝさまのいる所へ連れていつておくれ

さきく度毎にむねもさかるゝ思ひおしつけ御歸りだからおとなしくまつていよ御土産をた
んと下さるゝだます心はいかならんそれに引かへ御前様ハ御樂しみの身之上たの思へばいと
どむねふさがりまいらせ候あらぬ御しんにも少しハふびんと御さつし下されべく候また御
前様とわたくし事ハ若氣のいたりわがはいなながら親もゆるさぬ不義いたづらから二世も三
世もかわらぬとあだにちぎりしそのうちに思ひもふけぬ惣領の御腹にやどせしゆへせんか
たなくおして夫婦となるよふに人を頼んでいゝ入れても親類中で承知なくそれでもいまの
母様がもしもの事のおつたならと親類中にも義絶して獨りゆるしてミやうとゞなり水もも
らさずくらす内またも次男の出来しゆへもはや御うつり氣もあるまじおと安堵に思ひし程も
のふこふいふ事とは露しらす何面目に母様にどの顔さげて申わけそれに今でハよるべなき
しつけもなれぬ町居まちまい次第につまる貧のやミひとひにはだハうすふなりなんにもしらぬ子

供に迄寒い目させるも皆御心ひとつよりそれを思へばとふにもふち川へ身をなげて死んご
は思へども跡に残りし大恩の母様になげきのうへの又なげきまたハ子供のさぞやさそこま
るであるふごあいしやくの縁にひかれて今までハほそき煙りをつなぎしがもはや誰一人ミ
つぐ者もなくあさましや夜毎につなぐ三筋の糸むかしのばちの報ひ来て今ハはぢなるその
日過三月四月はよふくとつなぎし糸も切はてて今ハ中くいませし思ひにつもるまく
らのちり立居も自在ならされバありし昔のその身なら醫者上薬とおもへどもあす暮すたつ
ぎさへなくくだます二人の子それを見かねて母様はもつたいなくもやとわれのその代を
もてよふく親子三人むしろのすまひ只先立ハ涙にて食さへ絶て通わねバもはや世にな
き此身ぞとおもへバいとどかなしさのどふぞ一度御歸り我身ハ少しもいとわねど母様や二
人の子鬼にも角にもそれよりハおもひし御人とそふなりととても此身はやミじの鬼おも

へバその地の御方ほどのよふかわしらねども御うらやましき御身のうへ我なきあごで夫婦
さならハかならず子供をかわゆがりて下さるよふ御傳へ下されかし申上度事ハ海山なれど
も目もくらミ心もきへいる計りにて涙に筆もまわりかね讀まじき所は御すいもじ下されか
しくどふもくぜひく一度ハ御歸り母様ミ子供の事くれくも願ひあげなつたなき事
ながら私此世にありしうちいま一度御顔も拜しなば迷途の旅もまよひあるまじくこれのミ
樂ミありなぐも

よミおわつて二人ハわつと泣出ししは きく「ほんにわたし程ツミの深いものハありいますよこ
し言葉もなかりしがよふく顔を上
れほど苦勞をなんすとハ今までしりいせんさぞわたしを恨でいなんしやうに子供の事迄頼んで
くれろといつてよこしなんしたのがかわゆそふでなりいせん是をみるこころも馬鹿さんとはそ
われぬ義理とはいふものよどふも切にハきられいせんどふしいしやうトかつばとふし又もかめ

なる程聞バきくほど我身の様におもわれいしてかなしうありますそのおかミさんの身になつた
らまアどのよふでありましやう きく「それがこふじて氣やいがわるく今ハ御まんまも通らんと
やらそれでハどふもよくハなんなすまいもしもの事があつたならみんなわたしにばかりがあたり
いしやう かめ「それにまだはなしがあると長さんがいわしつたがなんでありますやらもしも切
てしまへとでハありませんかね きく「もしもそふいふ事ならどふしいしやうわたしやしんでし
まいゝす義理を思へば切ねべならすなんの悪縁やらたこへどのよふなつらいめにあへばきて別
れる事ハなりいせん かめ「まア聞てまいりいしやう トざし 長「どふだ見たか かめ「まことに
くかなしくつて二人で泣て計りおりいした 長「そふだろふよそれに付てはなしがあるまアこ
ゝへ來なせへ かめ「もしも切てしまへといゝなんすのでハありませんかへ 長「いんやそうでも
ねいまア人に聞へてハよくねいそばへよんなせへ これより至て小聲にて一向分らず ゴランく

第七

去ものハ日々かたに有徳のゑりにつく二世とかわせし其人も今ハ昔しの夢となり病のとも引かへ
て格子へ出るその日よりむかしにまさる全盛の中に夜も日も通ひ來る本通りの旦那かぶ 治兵衛
「ひるといふものハなんだかつまらねいもんだの 菊之助「むしいがよふあります 治「なぜ
「人がいるとじやまになりいすわな 治「くそをくらへあんまりしうだぜ きく「ほんとふであります
す トいだき 治「手前といふものハよつぽどうわきなもんだぜ此間まで馬鹿ミやらにほれてわづ
らつていたじやアねいかそれも今じやアどこへかやつてうそかハしらねいがおれにとやこふ言
じやアねいかどこぞでハおれも馬鹿を見たよふなめにあわせるだろふから早く足を引が上分別
だろふわへ きく「そりやア成程ひとしきりは惚いしたけれどもよくくかんがへて見いす逢
事も出來ずまたたとへ逢事が出來た所がこつちの身づまり計になりいすものをいまでハおもひ

出しもしいせん 治「それだまつて思ひがおそろしいぜ 」「もふ思ひもなんにもかまやアしい
 せんそれハそふと此間のものハ出来いすかへ 治「ウ、もつて来たが何にするのだ 」「なんに
 するつてよくつもつておみなんし病氣からこつちへいろく物入もありそして馬鹿さんをせか
 れぬ前はあの人のしおくりも皆こつちでしいしたものをもまたわたしも昔しの様なら主に苦勞も
 かけいすめいしこちらで計り呼かねもしいせんのだ 治「なんのとへ身上りをされたまつて心
 からの眞實でなけりやア面白くないといふもんだがよもや今まで言た事もうそでもあるめいか
 らまた足さアくめ尻してやろふからまア是で何かちつと片付たがい、ト二十兩 」「ありがと
 ふありますそれだが御氣の毒でありますね 治「何外人がましいおきのどくもいるもんか 」「
 「今夜約束の清水の開帳へ連れて御出なんしよ 是清水といふハ横田町より五丁程わき道にて山 治「い
 こふが二人計りでへさむしいから誰ぞ連れていこふ 」「なアに大勢でハ目立てわるふあります

からやつぱり二人と子供を連れて御出なんし 治「それもそふだしかしまだ七ツだから暮るまでハ
 間があるから○○○○○○○○ト○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○そのうちに日も西山に入はて、家々の見世
 ならぬ吉野か 治「さアもふいこふ勝手へそふらつて来るがい、 」「さつきそふいつておきいし
 た 治「そんなら往ふト先に立のれんをまくつて 」「龜菊さんそんなら 」「かめ「もふ御出なんすか
 へト互ひに見合目の中に何事やらん涙をふくミ後は言 」「キヤわたしとした事がとんだ物をわ
 すれてきいたよ 治「何を 」「アノ清水の観音さまへあげいしやうさおもつてこしらへてお
 きいた額をさ 治「そんなら子供に取にやるがい、 」「子供にハしれいせんからわたしが
 つて取てきいすからそこにまつて、おくんなんし 治「それじやア悪いぜ 」「じつきいつて
 きいす トいそがわしく走り行何思ひけん丁字屋へは歸らずして横小路にみた町といふありそこへいり
 「タイ菊之助 」「馬鹿さんか戀しかつた 」「つくだき馬「まアそんな事ハ後編にして人目にかゝら

315
241

ぬうち きく「そんならこゝを」はやく落よふ

後編ならびに若松屋三増屋伏見屋などいまだあらわさざる世界追々述作仕候

(巻の五)

駿遠豆叢書第二編
阿部川の流(下)
限定百部印行

昭和二年十月三十日納本
昭和二年十一月五日發行

編輯人 西ヶ谷 潔
印刷人 澤木 銀造
印刷所 平和堂印刷所
發行所 茂林脩竹山房

静岡縣原部郡原村原千四百八十五番地

静岡市傳馬町百六十四番地

静岡縣原部郡原村原千四百八十五番地

編者口座東京七二七四二番

終

